

母国の鎖国体制が崩れ去った中で使節一行がこの地を訪れると聞いて、彼の心はどのように揺れ動いたのだろうか。

ロシア政府の立場から、一行をもてなす接待の手はずを日本流に整えても、自分は母国を密出国した罪人である。同胞である幕府役人に名乗り出ることも出来ず、やがては出発して行く彼らを影から見送らなければならない、という切ない気持ちを橋が持っていたとしても不思議ではない。

福澤はペテルスブルグ滞在時に、日本人がこの地にいる不可解さや、その日本人「ヤマトフ」が一行の前に現れない理由について、様々な思いを巡らしていたと思われる。そして、『福翁自伝』の作成資料となった「西航日記」に記した一年にわたる旅を振り返る形をとる漢詩の中で、「他日若遇相識問、欧天不異故郷天」と詠い、その「相識」（互いに知り合っている仲）と「天」（てん）と言う文字に意味を込めて、「後日、もしも貴方にあの時のことを訪ねられたら、同地で受けた日本風のもてなしが、故国の雰囲気と同じようだった」と理解でき、ヤマトフへの思いやりから生じた含みのある句に託し、

間接的な表現で感謝の意を表したのであろう。

また、福澤は室内の様子を克明に述べながらも、この漢詩の扱いなどには触れておらず、「今日になって一々記憶もない」としている。しかし、仮に詩を書いた紙片をわざと室内に放置し、ヤマトフがそれを手にした場合は自分の意思が伝達できるであろうし、ロシア人に渡った時には詩の真意が理解されることはない。万一、ロシア側がヤマトフの存在を知られたくないのならば、彼に迷惑が及ばないように配慮していたとも考えられる。

その後、ヤマトフすなわち橋は明治6（1873）年にロシアを訪問した岩倉使節一行の勧めに応じて、翌年帰国し仏門に皈依した。彼のロシア滞在は約20年に及び、明治18（1885）年に65歳で逝去した。

なお、『福翁自伝』は明治32（1892）年に出版された。福澤が同書に詠う「相識」の関係、橋に「再会」していたかどうか、それはわからない。

（『福翁自伝』の「露政府の厚遇」の現代文は、『福澤論吉著作集』第12巻一慶應義塾大学出版会2003年より引用した。）

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)

## インターミッション 16 「コンピュータ・ムック500円シリーズ」 (学研)

最近では授業のレポートやプレゼンテーションの資料作成にパソコンの各種ソフトを利用することが一般的となってきました。そのためにパソコンを上手く使いこなすことと、的確な各種ソフトの使い分け等が大切となってきています。そこで活用されるのが、コンピュータ関係の書籍であり、様々な出版社からたくさんの書籍が刊行されています。ところが、その膨大な数の書籍から自分にあつた資料を選ぶ事は簡単なことではありません。また一冊一冊も決して安価ではなく、たくさん購入することはなかなかできないことと思います。図書館にも各種所蔵していますので、是非利用していただきたいのですが、ご承知の通り図書館の資料には返却期限日があり、いつでも自分の手元に置いて、調べたい時に使用するという事には向かないのが実情です。

そこで、今回紹介するのは学研から出版されている『コンピュータ・ムック500円シリーズ』です。まず、タイトルが示すとおり安価であることが最大の特徴で、「Word」、「Excel」、「Powerpoint」といったソフト関連から、エラーメッセージへの対処法を取り上げたものまで幅広く出版されています。実践的なテクニックもたくさん紹介されていますので、レポートや資料の作成には充分役立つ内容となっています。これらを利用しスキルを高め、そこからさらに高度な使い方をめざるのであれば、その時に専門書にチャレンジしてもらえればいいのではないのでしょうか。

パソコンやソフトを使いこなす能力は卒業して社会人になってからも大変重要なものです。大学生活の間に語学の勉強に加えて、ぜひその能力も高めていってください。

(管理運営課 宮杉 浩)